

花火大会の
ある街に
生まれて
@onaishigeo



シーン1 16の夏

小さい頃は毎年家族と。
中学生になって友だちと。
で、何となくグループ交際みたいになって。

今年は初めて浴衣を着る。
君に見せるために、今年の花火まで着なかったんだからね。

内緒だけどさ。

シーン2 45の夏

君と一緒に今年が最後かな。
来年はきっと友達と行くと言う。
長女もそうだったし。

ねえ君。
知らなかったろうけど、僕はずっと君の横顔を見ていた。
君の瞳に映る花火、
頬を染める花火、
それを見ているのが何よりも幸福だった。

内緒だけどさ。

シーン3 23の夏

「花火大会って言うと夕立」

「何年前だっけ？途中からものすごい豪雨になって」

「あったあった！あのときは近くのセブンがすごい一事になって」

「みんなが避難してとんでもないことに」

「えー！あの時セブンにいたの？」

「え、お前も？」

俺、仕事ですから。

この商売始めてから一度も行った事ないんです。
そりゃ行きたいですね。特に子供が出来てからは切実に。

でもね、店を開けてれば、誰かしらお客さんが来てくれる。
花火大会行けない人ってのもいるんですよ、
もちろん理由なんか聞きませんよ。
で、俺はカウンターのお客さんと一緒に花火の音を聞く。

まあ、これも風流じゃないですか。

シーン5 71の夏

今年も孫たちは来るのか？

そうかあ。

足利に花火大会があって良かったな。

せっかくの盆休みは、家族で旅行でもしたいだろうから、無理に帰省しろと言うのも悪いしな。

そうか、今年も来るかあ。

シーン6 19の夏

花火？ 行かねーよ。

ちっとも面白くねーじゃん。

え？

彼女いないから？

うっせー！

いたって行かねーんだよ。

なにになに今日はナンパするだどー！

おめーらじゃ無理だろ。

俺が行ってやってもいいぜ。

なんだよ、どうしてもって言うなら行くって意味さ。

シーン7 16の夏(20:36)

足場の悪い土手。

まめ、できちゃったかなー。

慣れない下駄で足が痛いよ。

ちょっと転びそうになって軽く触れたらぎゅっと手を掴まれた。

わたしのこと気遣ってくれていたんだと知って胸が高鳴る。

もう、花火どころじゃないよ、わたし。

シーン8 27の夏

遠くで花火の音がする。

「最初から最後まで全部スターメインならいいのに」

「それじゃ鼓膜が破裂しちゃうよ」

そんな他愛のない会話が、なんでこんなに切なく思い出されるんだろう。

ねえ、君は今どこで見えていますか、

今年の足利の花火。

ねえ、誰かと一緒ですか？

花火大会のある街に生まれて

<http://p.booklog.jp/book/36047>

著者 : onaishigeo

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/onai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36047>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36047>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.